

# 姫路が誇る地域資源 「世界文化遺産・姫路城」

## ■ 世界文化遺産登録と平成の大修理

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦後、徳川家康は大坂の豊臣秀頼や西国の反徳川の諸大名への押さえとして、姫路に家康の娘婿で信頼のおける池田輝政を配しました。西国将軍と呼ばれた輝政は、豊かな財力の下、約9年の歳月を費やして城を改修し、羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)が築いた天守を取り壊し、改めて五層六階地下一階の天守を築きました。これが現在の姫路城のはじまりであり、江戸城と並ぶほどの威容を持ち、幕末まで徳川幕府の西の要としての役割を果たしました。

その後、戊辰戦争や廃城の危機を乗り越え、太平洋戦争の戦禍の中でも奇跡的に生き残りました。存亡にかかる重大な危機を免れた姫路城は、昭和26年に国宝指定を受けました。昭和31年から8年をかけて昭和の大修理が行われ、平成5年には法隆寺とともに日本で初めて、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の世界文化遺産に登録されました。

昭和の大修理から約半世紀が過ぎ、近年、天守に傷みが目立ってきたことから、8万枚を超える瓦の全面葺き直し、屋根の目地漆喰の全面修復、壁面漆喰の修復、耐震性を向上させる構造補強などを行うため、最新技術と伝統技術の粋を集めて、姫路城を後世に継承するための保存修理工事が、平成21年から始まりました。

現在、文化財の保存と継承への理解を目的に、この工事期間中ならではの特別な視点で工事を見学できる修理見学施設「天空の白鷺」を開設しています。文化財の保存修理工事を日本で初めて常時公開する施設として注目を集めています。



### 【参考】世界文化遺産・姫路城(平成5年12月11日登録)

遺産区域:構成資産 107ha(コアゾーン)、緩衝地帯 143ha(バッファゾーン)

顕著な普遍的価値の評価基準:

- 人間の創造的才能を示す傑作であること
- 歴史上の重要な段階を語る建築物、その集合体、科学物質の集合体あるいは景観を代表する顕著な見本であること